

《もくじ》

■特集:この国は災禍を契機に変わり得るのか  
 ~当然としてきたこれまでの生き方を改める~  
 2頁・社会全体の価値観をどう変えていくか  
 …… 本山 佐利 (津南町観光協会理事)  
 4頁・人々の暮らしの関係の再構築をめざす復興 一宮古市田老地区を事例に  
 …… 細木 博雄 (正会員)  
 7頁・第28回水郷水都全国会議津南大会にご参集を!

# 奔流

題字揮毫・梅原猛

《第8号》

■発行  
 千曲川・信濃川復権の会  
 〒184-0012  
 東京都小金井市中町2-5-13  
 FAX・TEL 042-381-7770  
 ■発行人・根津 東六 (共同代表)  
 ■編集人・矢間秀次郎 (共同代表)  
 ■〒振替・00120-0-710488

大河の一滴 (8)

## いのちが続いていく世界へ

—〈3・11〉が問いかける未来への構想力—

石橋 浩治 (編集委員)



3・11の巨大地震と大津波は、そして、福島原発事故―放射能汚染は、大

3・11が問いかけている課題を考えてみましょう。

### ▼いまを生きるごとく無事な時間世界

戦後60年余の経済優先の文明と社会システム、その根拠となった科学と未来への神話は、未来のわからなさ、生きていること、生きて在ることのわからなさ、それをわかれると錯覚させられてきたのではな

### ▼このち、存在の地平から

「未来」ということばに「いのち」と「希望」ということばを重ね合わせてもいいでしょう。それは、ことばの可能性の探索であり、風景としての自然を対話の相手として、ことばだけでは語り尽くせない豊かな精神を形成する能力を回復していくことです。「古代」の人々が持っていたであろう、自然の深層まで下降して、情念や情操が豊かに溢れた世界として感得すること、その能力は近代システムに回収された言語空間では失われ、もはや、わたしたちの日常言語の地平では成り立たなくなっているのです。

西欧近代を絶対視して、その発展を「歴史」とみなす段階的な発達史観ではない、自然と人間の根本的な矛盾を基底に置きつつ、生命(いのち)と存在が充たされていく世界⇨未来の構想力が求められています。

\*哲学塾東京分校の「よなもの」世話人。

生命とはなにか、人間にとって自然とはなにか、人間もその一部である自然とどう関わっていくのか(労働、科学)について、もう一度つかみなおし、そして、伝統と風土に根ざした地域力こそが、近代システムの終焉と対峙し、復興への構想となること、21世紀の思想的事件として

だが、その錯覚を前提にして想定された未来⇨明日のために、将来のために生きるという近代の発想とスタイルに代え「いま、生きている」という充溢を、そんな瞬間の深さと輝きをもっと大切にす

3・11では、生命(いのち)⇨存在のレベルのいけばん深いところまで被災したの